

モード Mode Mode は語る

中野 香織

今年のアカデミー賞授賞式では、レッドカーペットにピンクがあふれた。女優ばかりではなく、「アクアマン」のジェイソン・モモアまでピンクのタキシード風スーツを着用した。筋肉自慢のモモアが着るピンクを見ていたら、かつて西洋では、ピンクは血の色の赤がうすめられた色とみなされ、「強さ」ゆえに男の子の色だったことを思い出した。逆にデリケートなブルーは女の子の色だった。

現代ではピンクは女の子の色とされていることが多いが、これは1950年代のアメリカで定着した慣習である。色によるジェンダー分けなど時代に応じて勝手に起きるにすぎない。実際、18世紀のヨー

ピンクをめぐる狂騒

パンクでプリティな力強さ

ロッパの宮廷人は、男も女も華やかにピンクを着こなしている。

「華やかに」と書いたが、ピンクがそんな印象を与えるのは免れない。華やかさが「男にふさわしくない」と決めつけられたのが50年代以降だったのだ。

昨秋発売された「ピンク：パンクでプリティでパワフルな色の歴史」という本がある。編者はニューヨーク州立ファッション工科大学美術館館長のヴァレリー・スティール。この本に、ピンク効果のエピソードが紹介されている。70年代後半、米アリゾナ州の監獄で、受刑者にピンクのトランクスをはかせたところ、暴力性や攻撃性が減る効果が見られた。そ



ピンクについての研究書 Valerie Steele ed., "Pink: The History of a Punk, Pretty, Powerful Color" (Thames & Hudson)

れを受け、他州の施設でも部屋の色などにピンクが続々と採用されたという。

ピンクという色そのものが、人間から暴力性を減少させるのか。それとも「女の子の色」との社会的レッテルを意識することで、脳内から攻撃性が減少するのか。因果関係はよくわかっていない。

21世紀に入り「ミレニアルピンク」の流行を筆頭に、ピンクはクールな色としての評価を得たが、いまだどこかまじめさに欠ける色と見られている。2017年のワシントンでは、「ウィメンズマーチ」に参加したフェミニストたちがピンクの帽子で抗議したが、重要な問題が軽視されてしまうとの批判も浴びた。

この季節、そんなこんなの人間界のピンクをめぐる悩ましき狂騒を、自然界に咲き誇る桃や桜がほほ笑んで包み込んでいるようにも見える。(服飾史家)